第6室　書跡―古代インドと日本の古経典―
展示解説

N-8　梵本心経および尊勝陀羅尼（ぼんぽんしんぎょうおよびそんしょうだらに）

ターラ樹の葉を乾燥させ、両端を切り、横に界線（かいせん）の罫（けい）をほどこし、「般若心経（はんにゃしんぎょう）」と「仏頂尊勝陀羅尼（ぶっちょうそんしょうだらに）」を梵字（ぼんじ）で記した貝葉経（ばいようきょう）です。古代インドでは、紙が定着する以前に、ターラ樹の葉を用いた貝葉写本が盛行しました。この貝葉経は、最も古い部類に属するものとして重要視されます。

N-8 附属　訳経記（やくきょうき）

江戸・湯島に霊雲寺（れいうんじ）を開いた真言宗の僧である浄厳（じょうごん、1639～1702)は、悉曇（しったん、梵字・梵語に関する学問）学者として知られ、梵学に優れていました。この訳経記は、元禄７年(1694)に、浄厳が法隆寺伝来の梵字の貝葉経（ばいようきょう）二葉、「般若心経」と「仏頂尊勝陀羅尼」を写しとり、朱点や句義を注記し、あわせてあとがきを書き記したものです。

N-11　賢愚経断簡（大聖武）（けんぐきょうだんかん　おおじょうむ）

この写経は、13 巻本『賢愚経』巻第五の沙弥守戒自殺品（しゃみしゅかいじさつほん）第二十三に相当する断簡です。筆者は聖武天皇（しょうむてんのう、701～756）と伝えますが自筆ではありません。写経のなかで最も雄大かつ力強い書風で、「大聖武」の異名があります。

N-14　仏名経（ぶつみょうきょう）

『仏名経』は過去のあやまちを悔い改め、念仏の力で罪を滅ぼすために、諸仏の名号（みょうごう）を受け入れて覚えておくことを説いた経典です。この「仏名経」は過去、現在、未来の３巻で構成され、それぞれ千の仏名をあげています。各巻の奥書（おくがき）により、永治元年（1141）に五師隆慶（ごしりゅうけい）が先師・林幸大師（りんこうたいし）の一周忌を供養し、同時に仏名会（ぶつみょうえ）を催して、この経を施入（せにゅう）したことがわかります。

第6室　染織―蜀江錦帯と白氈―
展示解説

今回は法隆寺に伝来した古代の染織品の中で最も名高い作品の一つである「蜀江錦帯」とあわせ、「白氈」を展示します。飛鳥から奈良時代にかけて法隆寺で用いられたこれらの作品は、人から人へ伝えられた「伝世品（でんせいひん）」としては、世界最古の染織品コレクションとして知られています。いまから１３００年以上昔に作られたとは思えない鮮やかな色彩を残す錦、またはるばる大陸から伝えられた白氈からは、飛鳥時代から奈良時代にかけての高い芸術性と国際性を知ることができます。

N-47　蜀江錦帯（しょっこうきんおび）

この錦の技法は経錦（たてにしき）と呼ばれるもので、経糸方向に色糸を使い、その浮き沈みで文様を表わしています。奈良時代以降、現代まで一般的に織られている錦は緯錦（ぬきにしき）といい、緯糸で文様を表わしますが、経錦はそれ以前の古い技法です。古代中国の蜀(現在の四川省成都市周辺)は錦の生産地として名高く、法隆寺に伝わる赤地の経錦もこれにあやかって「蜀江錦」と呼ばれています。格子のなかには連珠をめぐらせた可憐な蓮華文を収めます。法隆寺には同じ文様の錦が複数伝えられていますが、小振りながら最も文様が整っているのがこの錦です。法隆寺の伝承では聖徳太子のお妃であった膳妃（かしわでのきさき）の帯とされています。

N-56　蜀江錦幡残欠（しょっこうきんばんざんけつ）

法隆寺伝来の染織品を代表する錦です。古代中国の蜀(現在の中国四川省成都市周辺)では錦の生産が盛んで、その美名は詩文を通して日本にも伝えられました。これにあやかり、法隆寺の赤地の錦には、江戸時代より「蜀江錦」との美称があります。西アジア風の植物文と連珠文で円を縁取り、円の中には香炉を挟んで向かい合う獅子や鳳凰を、外側には天馬(ペガサス)や雄鹿を表わしています。西アジアや仏教美術など様々な由来をもつ文様を取り合わせ、中国古来の経錦(たてにしき：経方向に色糸を用い、その浮き沈みで文様を表わす技法)で織り表わした華麗な錦です。中央の褪色の状態からみて、本来は仏堂を飾り立てる幡（ばん）の一部であったと考えられます。

N-54-1　白氈（はくせん）

氈とは羊毛で作られた敷物で、現在の絨毯（じゅうたん）のようなものです。古代の寺

院では僧侶の敷物として用いられ、日本では法隆寺と正倉院にのみ伝えられました。

羊毛をほぐして並べて水分を与え、これを巻き上げて圧縮させることで、乾いていくうちに毛が絡み合い、一枚の敷物となります。つまり、現在でいうところのフェルトの技法で作られた敷物です。このようなフェルト製の敷物は現在も中央アジアの遊牧民が使用しており、この氈もおそらく中央アジアで作られた後に唐や朝鮮半島へ至り、そこから海を越えて伝えられたものと考えられます。一見地味な作品ですが、その背後には古代日本における壮大な国際交流が控えているのです。